豊平川河畔遺跡墓18（図4）と元江別1遺跡墓19（図5）の出土土器群を比較すると、墓18図4-1は縄文地紋で胴部最大径部分の横走沈線が、墓19図5-3・13と似る。今回の小型壺図4-2は一単位の穿孔と胴部文様構成、口唇際の無紋帯と底部際が縄文地紋のみで沈線文が無い点が図5-6・10に似る。図4-7は頸部の幅広い無紋帯があり、その上下に横走沈線が施され、帯の下に刺突列が横方向に並ぶ点、そして、口唇部に短い縦方向の短沈線が横方向に連続して並ぶ点、そして器形が図5-11と似ている。両群は時期的に近いと考える。両群を様似町冬島遺跡出土土器の検討(大泰司2021P.15)で作成した表1のどこに位置するか考えると、網掛けで示した時期の頃であり、結果、川岸場式並行の可能性が高く、上代川遺跡の小型壺と豊平川河畔遺跡の小型壺は近い時期の土器と考えた。

上代川遺跡出土弥生土器は川岸場式の頃をⅤ群3類として、そのうち文様要素から、田舎館式ひいては恵山式の影響が考えられるものをＡとした事は２項で触れたが。まとまりは三つあり、残り二つのうちＢは北上川沿いの土器型式・川岸場式、Ｃは馬淵川・新井田川流域・八戸市域ないし野田村の在地的な特徴を持つ土器(岩埋文2020p.167)である。

Aとした今回の小型壺が江別市の小型壺と

「類同」とまではいかないが、類似点があった事を記した。今後も検討を続けたい。

表1

江別市元江別1遺跡墓19出土土器と、様似町冬島遺跡出土土器に類似点があったという内容の文章(大泰司2021ｐ.10～11)を今回、引用した。この様似町と野田村とは人の行き来が盛んで、1998年に友好村町を締結した。この人々の動きは、流れの強い津軽暖流を避けた結果なのであろうか。

上代川遺跡では北田勲氏の采配の元、作業に没頭できました。土器整理は石川日出志先生のお力で乗り切る事が出来ました。江別市では佐藤一志氏に便宜を図っていただいております。記して感謝いたします。

引用文献

2005　石川日出志『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年』

2020公益財団法人岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター『上代川遺跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第713集

1983　江別市教育委員会『町村農場1・七丁目沢7・旧豊平川河畔―江別チャシ―・後藤・大麻3』江別市文化財調査報告書ⅩⅦ

1981　江別市教育委員会『元江別遺跡群　後藤遺跡　旧豊平川河畔遺跡　元江別1遺跡　元江別2遺跡　元江別5遺跡　元江別10遺跡　元江別11遺跡』江別市文化財調査報告書ⅩⅢ

2021　大泰司統　「冬島遺跡の特徴的な土器」『様似郷土館紀要　３号』